

## 第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

### 第11回委員会

日 時：平成21年6月19日（金）18:30～

場 所：総合体育館 視聴覚室

出席委員：高田委員、江上委員、橋委員、島森委員、渡邊委員、中村委員、井原委員、  
和久田委員、島田委員、近藤委員、増田委員、清本委員、西村委員

#### 議事

（高田委員長） 今日、アンケートの速報結果と、中間報告のたたき台について。

#### ①市民アンケート速報結果について

・コンサルタントより説明。

（高田委員長） アンケート結果について、この点は注目したらどうか、というところがあれば、お伺いしたい。

（島森委員） 「防犯・治安対策」と、「災害時の対応」について、8ページの「取り組まなくてはならない課題」で非常に関心が高いことと、「一番重要な課題」で多かったことについて。武蔵野市以外のところでは今でも町内会や自治会がある。町内会だと防犯などに結びつきやすいというか、顔を知っている、隣近所を知っているということが多く、というつながりがあるので、コミセンもそう望まれているのではないかと思った。

町内会とは別でも、少しでもコミュニティで顔見知りが増えて、人のつながりがあり、防犯・災害の時に頼りになるものがあつたらいいと地域の方は思っているのではないだろうか。

（高田委員長） 防犯・災害をどう解釈するか。単一回答で、一番重要なものを見ると、災害はぐっと減る。だいたい半分ぐらいの人がトップに防犯・治安を挙げていることが伺える。9ページと比較すると災害時の対応については、おそらく2番目になっているのではないかということが、見えてくる。

（高田委員長） 11ページで、関わりたいことについては、複数回答だが、防犯と災害、また高齢者というところが、まったく同じような傾向で出てきている。結局、取り組まなくてはならないことに、関わりたいことが重なっていることがわかる。

（増田委員） 問9-3、18ページ「コミセンはどのような場所であつたらいいか」では、

「気軽に立ち寄れる場所」が一番多いが、23ページの「利用しない理由」で「入りにくい雰囲気があるため」が上位に入っている。「コミセンを知った方法」が16ページにあり、「市の広報誌などを見て」が一番多くなっている。それを考えると、市報を見ている人が大変多いということなので、利用者を増やしていくには、市の広報誌にコミセンからのメッセージなどを入れるようにしていったらいいのではないか。

(高田委員長) 市報の一番裏に、各コミセンのお知らせがある。

(増田委員) コミセンの催し物の内容はあるが、コミセンからのメッセージのようなものはないと思う。

(高田委員長) ところどころそれぞれコミセンの小さなコラムがある。

(橘委員) 1コミセンずつ、毎月出している。

(増田委員) そうすると、1周するのに1年ぐらいかかる。そうではなく、それぞれのコミセンの場所に、たとえば「運営委員募集中」とか「催し物にお手伝いを募集しています」という呼びかけがあったらどうか。気軽にお手伝いができる感じで入れないと思われているのではないか。

(高田委員長) 自分たちで自由に関わることができるということは、6割ぐらいは知らなかったから、あまり知られていなかった。

(事務局) 毎回、1日号、15日号にコミセンの欄は最後のページの半分を使って掲載している。各コミセンのイベントが月に2つぐらいあるので、その紹介だけでほぼいっぱいになっている。そこに募集もあり、案内や、年度初めになるが運営委員、協力員を求めている、という記事はある。

(渡邊委員) 25～27ページの認知度について、いずれも認知度が低い。日頃全戸配布など、いろいろやっているのに、こんな受け止め方をされているのは、ショックだ。

その中で、26ページの間14「関わることについての意向」で、関わってもよい人が52.2%いるのはとても救いだと思う。

もう1つ、PRと同時に、窓口の対応、24ページ問11「利用促進のために必要な取り組み」で、「気軽に立ち寄れる雰囲気をつくる」「イベント・行事を充実させる」がそれぞれ58.5%、41.0%となっている。これはコミュニティ活動に携わっているものとしては、非常に反省する、心すべきものだと感じた。

(高田委員長) ボランティアの運営やコミセンの運営が誰でもできるという言い方について、以前行ったことがあるか。

(事務局) 評価委員会でやったこともある。

ちなみに15ページの「コミセンの認知度」だが、今回「知っている」と「だいたい知っている」が78%、「知らない」が22%だが、84年の時は「知っている」「だいたい知っている」が61%、「知らない」が38%だった。6割だったものが99年に同じ調査をやった時には75%になった。そこから10年経った今回は78%になっているので、この25年の間にコミセン自体の認知度は上がってきているのではないかと思う。

また、26ページの「関わることについての意向」だが、これも同様の調査を99年に行った。99年も「関わってもよい」「すでに関わっている」を合わせて57%で、今回は58.6%なので、ほとんど変わっていない。認知度は上がっているのに、関わりたい人の数は増えていない。それでも、6割近くならば、それなりの数字なのではないか。

(橘委員) 12、13ページの「最もよく参加している団体」で、武蔵野市ではそんなに多くないと思っていた「町内会・自治会」が意外に18.3%、それに対してコミセンが2.1%なのは、ショックだ。

(高田委員長) これは、マンションの自治会などではないだろうか。

(橘委員) それはやはり強制加入だろうか。ここが少々気になった。

あとは18ページの「コミセンとはどのような場所だったらいいか」で、「気軽に立ち寄れる場所」であってほしいが60.3%ある。それに対して23ページの「利用しない理由」では、「入りにくい雰囲気があるため」となっている。これは裏腹の関係だが、入りやすい雰囲気というのは何を言っているのか、このアンケートから出てくればよいのだが、この表からだけでは、どうしても読み取れない。

(高田委員長) 気軽に立ち寄れる場所であってほしいということだ。しかし、今そうではないとは言っていないのではないか。

(橘委員) これを解消すれば、もっと利用度が上がるし、認知度も上がる。窓口の対応も含めて、なかなか地域の方々に伝わっていないのが実体なのだろうか。

(高田委員長) 18ページではコミセン一般について言っているわけだから、批判をしているのではないと思うが、入りにくいというのは、批判だ。

(橘委員) そのとおり。だから、これは裏腹な関係というわけだ。自分たちがこのような場所を望んでいるのに、そうではないということを行っているわけだ。

これに関して、2つの項目についてクロスをかけて、何か浮かび上がらせることはできるのか。

(江上副委員長) 利用していない人の中で、利用しない理由として入りにくい雰囲気があるというところを挙げた人が140人ぐらいいるが、この人たちがどのようなコミセンになってほしいと思っているか、という集計はできる。

(橘委員) コミュニティ協議会については、住民は、コミュニティセンターという建物と協議会という運営主体を混同している。私は協議会を知らなくても、参加してくれればいいわけだから、協議会についてここで質問するのはあまり意味がないと思う。

(井原委員) 8ページの「取り組まなくてはならない課題」で、「住民間の交流・連携」は21.4%なのに、9ページの「一番重要な課題」では、5.4%とかなり減っている。つまり、それほど住民間の交流や連携に課題は感じていないのかと思う。

そのまま12ページを見て、「参加している団体」で、「参加している団体はない」という回答がとても多い。

そのあとの26ページ、コミュニティセンターの運営について、「まだ関わっていないがこれからも関わりたくない」という41.4%が気になっている。ここはコミセンの運営のことについてしか聞いていないが、グループや組織などがなくてもいいという人が非常に多いのではないかと。積極的に何か自分からやっていきたいという気持ちはあまりないのではないかと。何か問題があれば関わってもいいと思っても、具体的に「こんなのをやってみますか」と言われると、「それはいいです」と言いたくなくなるものなのだろうか。

(高田委員長) 今言ったところと前のところをクロスさせてみれば、この4割の意見が、どのような人たちなのかが出てくるのではないかと。

(井原委員) 課題の中で防災・防犯、災害時の対応について課題として挙げている人が多いが、「あなたが何かを担ってください」と振られると、誰も手を挙げなくなってしまうのではないだろうか。「自分は何ができるのか」という意識が弱いのではないかと考えた。

(高田委員長) 防犯と災害の2つですね。

(島田委員) これだけのnでどこまで細かくできるか分からないが、たとえば、コミセンごとに分けていくことは可能か。できれば各コミセン別の調査があったほうが、いろいろと手を打ちやすいのではないかと。

(コンサルタント) 最もよく利用するコミセンごとにすると、10や30といった数になってしまうので難しい。居住地単位でよければできるかもしれない。

(島田委員) それからもう1つ、地域ごとの回答数が出ていたと思うが、発送数と、それに対する回答数からも、その地域がどのような関心を持っているのか把握できるのでは

ないか。

(事務局) 無作為抽出だが、一定のルールを決めているので、地域ごとにはすべて人口に比例した発送数になっている。回収数もほぼ人口に比例しているのではないか。

(島田委員) では、比率はほぼ同じと考えて、たくさんあるコミュニティを、1つにまとめてどうするかという検討の仕方だと、なかなか手が打てないのではないか。もう少し細分化していったほうが、具体的にこの地域はどうかと、それぞれに特徴があるのではないかという想定のもとに話をしているのだ。たとえば吉祥寺南町、東町と、私が住んでいる関前とでは、だいぶ違うのではないかと思う。

(島森委員) 22 ページの間 10-4、窓口の雰囲気のところ、これは「最もよく利用するコミセンの窓口は話しかけやすい雰囲気だったか」と書いてある。ここでは「とてもいい」「普通」まで入れると、かなりいい%の回答だ。最もよく利用するという事は、結局気に入っているからだということだ。

(高田委員長) 問 10 の「コミセンの利用実績」で、「今も利用することがある」という人に聞いているわけだから、そういう人たちの話だ。

(島森委員) 違う方向からの話だが、いろいろな地域のコミセンを利用する方と話をした。たとえば「気軽に立ち寄れる場所は、どのようなところで感じるのか」と聞いたら、やはりコミセンによっては気軽に入りやすい雰囲気で挨拶をしてくれたり、「どうぞお使いください」という雰囲気で向かい入れてくれたりするということだった。しかし、あるところは、上から視線で「貸してやる」という感じだったので、「二度とあそこのコミセンには行かない」とのことだった。気軽に立ち寄れるところは、どこでもそのような雰囲気を持っていて、またあのコミセンには行ってみよう、このコミセンは利用しやすいから行ってみようと思うという話を聞いた。

(高田委員長) 今はもう利用していないという人の意見はここには出ていないから、それがこのデータから読み取れるかだ。

(清本委員) 21 ページの「最もよく利用するコミセン」では、「中央」が一番高くなっている。これは、駅から近く、武蔵野市の中央にあるといったロケーションの問題がかなり影響するのではないか。

境南の利用がわりと高いので驚いたが、あそこに集会施設がないという理由もあるのかと、いろいろ考えた。

もう1つ、「取り組まなくてはならない課題」として、防犯・治安対策が一番高く、災害

時の対応が2番目になっているが、どの年代層が関心を持っているのかを知りたい。災害時の対応は、高齢者よりも少し若い世代が気にしているのではないかと思う。

もう1つは、地域のとらえ方について。6ページの、「地域の範囲のイメージ」は武蔵野市全体という回答が一番多いのには驚いた。普通は自分の町や丁目とを感じる人が多いのではないか。

(高田委員長) 地域を武蔵野市と言っている人たちについての内容を調べる時には、どれとクロスさせればよいだろうか。

(島田委員) 今の話は、たとえば働くところについて、市内・市外と調べてある。市外に勤めたり、出ている人は、やはり武蔵野市を地域と見る可能性は大きいと思う。70%が市外に出ているという割合から、そうなる可能性は大きいのではないだろうか。

(高田委員長) それは、有職の就業場所だから、有職者についてしかできない。

(井原委員) 27ページの「コミュニティ協議会の認知度」で、80.2%の人が知らなかったことについて、協議会そのものを知っている必要はない、この数字は当然なのではないかという意見に、驚いた。

コミュニティ協議会を、「行事やイベントの企画実行をおこなう組織として」と、絞った形で聞いている。本当はコミュニティ協議会というのは、コミュニティづくりのための協議会だ。このような聞き方をしないで、単純に「武蔵野市にはコミュニティづくりのためにコミュニティ協議会がある」と聞いたら、もっと数字が減ったのではないかと想像する。

コミセンの運営や運用をどう上げていくか、価値観をどう持っていくか、という話ではなく、武蔵野市の今まで目指してきたコミュニティづくりそのものが浸透していないのではないか。

(清本委員) 利用しやすい雰囲気とは何か、という問題提起があった。ちょっと1杯お茶を飲みに寄れる雰囲気があると、みんな気軽に寄れるのではないかと思った。

(高田委員長) 今のところは24ページの「利用促進のために必要な取り組み」に、「コミュニティカフェなど飲食ができる機会を増やす」という項目が出ている。

(橘委員) 31.7%は、かなり高い比率だ。そうしたこともあるだろうが、「貸してやる」的な態度などのほうが、私は大きいのではないかと思っている。その理由が浮き彫りにされてくれば、ターゲットがはっきりして改善もできる。つまり、すべて窓口にかかってくるのではないかということだ。

(清本委員) 研修等はやっているのか。

(橘委員) やってはいるが、社員教育的なことは実際にはできない。いろいろな経歴の人が集まっているため、その人の個性は直せないところはある。

(和久田委員) 入りにくい雰囲気に関して、1人で来る人は、コミセンは団体で借りている人が多い雰囲気があるので、多分1人では入りにくいのではないか。以前「明るさがないと入りにくい」とのことで、明るい入りやすいという人がいた。同時に建物の入り口、玄関の雰囲気も入りやすいかどうかと関係してくるのではないか。だから、このアンケートでは見えない部分がたくさんあるのではないか。

また27ページで、コミュニティ協議会という「組織」は、本当に関わっていない人の場合まったく知らないから、この数字が出てくるのだろう。

(橘委員) コミセンの認知度と協議会の認知度とは明らかに数字が大きく違う。これは聞き方の問題だと思う。コミセンの認知度は両方合わせて77.9%あるが、それに対して協議会は2割弱だ。

(高田委員長) 運営の仕方、ボランティアが運営していることを知っているという回答もかなり低い。

(橘委員) センターは、みんな知っていると思う。私は、協議会は知らなくてもいいと思っている。センターに来てくれればいい。

(井原委員) 私はそうは思わない。コミセンの運営を協議会が担っているのを知らなかったのは仕方ない。しかし、もともとコミュニティ構想で、そのために協議会が分けてあって、しかも住民総会などを開いているところだ。80.2%という数字は、今までのやり方の何かが間違っていたということで、方向転換が必要なのではないか。または今までの検証は必要だ。

(島森委員) 協議会の運営委員の人たちも市民の1人であって、そこでコミュニティを作ることが楽しみの1つでもあるし、広がりのあるものを求めてやっているのではないか。そのような意味で知られてもいいと思う。

コミュニティ協議会そのものを直接出して、知られなくてもいいというのはどうだろう。コミュニティ協議会もコミュニティの1つであるということを、私は知って欲しい。

(橘委員) 正直に言うと、運営委員でもセンターと協議会を混同している。センターを誰が運営しているかは、一般住民は、あまり知らない。実体はボランティアがやって、協議会が運営しているのだが、一般の人にそこまでPRしてもしょうがない。要するに、センターにたくさんの人が気持ちよく来てくれれば、コミュニティ三原則から、コミセンの

運営に関われる人が出てくればいいのではないか。最初から協議会を表に出すことは、住民にとって非常に理解しづらいことになる。

(井原委員) 武蔵野市のコミュニティづくりのために何かを行っている協議会がちゃんとあって、その仕事の一部分として、コミセンの運営まで行っている、ということなら分かるが、今回の質問の仕方はかなり絞って聞いているし、この結果をそれが実体だからと、ただ認めてしまうだけでは、違うのではないか。

この回答をどう見るかというより、今後のコミュニティのあり方、どう運営していくのかということを考える上で、そこはきちんと押さえておくべきだ。

(島田委員) 今までの実体と、今後どうするかを分けて考えたらどうだろう。

今回のアンケートの中では、これから取り組んでいくべきことは何かというところまで聞いているので、それをこれからのコミュニティ協議会で取り上げるかどうか、これからの話になるのではないか。

(西村委員) 私たちでもコミュニティセンターを建物と、「女性センター」などのソフトの意味と、両方で使っている場合がある。

(橘委員) 立ち上げの時にはコミュニティ協議会のような考え方は必要だが、歴史を経るとともに変わってしまう。運営上、それを前に出して、三原則がどうだ、といっても、地域の方にはなかなか理解してもらえないと思う。

まずは、コミセンにたくさん来てもらうことだ。そうすれば、その中で運営委員会にも協議会にもたくさん入ってもらえるのではないだろうか。

私はセンターと協議会の認知度にこれだけ差があるのはなぜかということから、そう考えている。だから協議会をコミュニティ条例に照らして無視していいということを行っているわけではない。日常のわれわれのコミュニティ活動の中ではそのようなことはあるが、一般の方に「協議会、協議会」と言っても、あまり意味がないと思っている。

(高田委員長) これについては、方向付けで、どこが問題になっているかという時にやるので、その時もう一度ご意見いただく。

(島田委員) 12ページの「参加している団体」で、団体に参加していない人が6割ぐらいいる。この影響をはじき出す方法はないだろうか。言い換えれば、団体に入っている人はよく使っていて、入っていない人は使っていないという結果になるのかどうか。

これで欲しい結果が出れば、橘さんが言うような合衆国が生まれてきて、それをもう少し増やしていけば全体もよくなるなどの話になるのかどうか。



(西村委員) 「参加している団体がない」という人と、どこであれ「参加している団体がある」という人と、たとえば19ページの「コミセンの利用実績」はクロスできる。参考資料として私も知りたい。

(中村委員) 私は橘委員の意見に賛成だ。協議会というのは陰の立て役者なので、コミセンの認知率がだんだん上がっているという事実のほうが大事だと思う。8割まで来ると、これ以上伸びることはないだろうという気がするが、そこまで認知されている、コミセンがあるということが分かっているということだけでも、非常にすばらしいことではないか。

(江上副委員長) 25ページから27ページあたりの認知度は、かなり高い数字だろうと思っている。ボランティアによって運営されていることを知っている人が42.5%というのは、かなり高いと思う。

今回、答えてくれた人が半分、回収率50%ということだが、その50%の人たちは、たぶんなにがしかコミュニティに関心がある人だろうと思う。そのようなバイアスがかかっているということを考慮しても、根拠はないが、この数字はかなり高いと思う。

それから、防犯・治安、災害ということについて7割以上の人が地域で取り組む課題として挙げている。このことに取り組まなければいけないと、短絡的に考えないほうがいいだろう。まして、コミュニティ協議会がやるべきことだ、と考えないほうがいいと思う。

特に、この2つに7割以上の人が反応したというのは、いろいろな原因が考えられる。最近、体感治安が悪くなっているとよく言われている。何となく世の中が物騒になっているようだという社会的雰囲気がある中で、このような選択肢があると、一番反応するのではないか。

それから、地域の範囲については、自分の人間関係の範囲だと思う。あまり地域に人間関係の広がりがない人たちは、「自分は武蔵野市民だ」という意識が強いのではないだろうか。

また、コミセンは気軽に寄れる場所だともっと知らせたほうがいいというのは、その通りだが、立ち寄ってもらって、どうなるのかということだ。ふらりと立ち寄る雰囲気を作る、それでその気になって入った人が、何をそこで得られるのか、何ができるのか、などの用意も同時にしておかないと、不十分な話になってしまうのではないか。

これは、別のことにも通じる。多くの人がコミセンに行くようになると、地域はどう変わるのか、という見通しを持っておくべきではないか。

もう1つは、このような調査は、選択肢を並べて、○を付けてもらうがゆえに生じるデ

メリットがある。それは曖昧な部分を見逃してしまうということだ。たとえば、団体に所属しているか、していないか、ということだけが、地域の人をつながりを示しているわけではないと思う。少なくとも顔見知りという人がかなりいるということ、会ったら挨拶をするという項目は、かなりな数が挙がっている。挨拶する程度 of 関係を、何かもう少し実質的な関係、いざという時に助け合える関係に、どう育てていくかが課題なのではないか。それを実現するために、コミセンはどう役に立てるか、という読み方ができる。

(近藤委員) 気軽に立ち寄ってどうするのだろうと、ずっと疑問に思っていたが、今の副委員長の意見ですっきりした。実際に気軽に立ち寄るといふのは、どのようなことを指しているのかということが、一番の疑問だった。

(高田委員長) それでは、ここで1番目の議題を終わりにして、皆さんがそれぞれ気がついたところ、これだけはクロスしてもらいたいことを、事務局のほうに連絡していただきたい。

次に「中間報告のたたき台について」。

## ②中間報告骨子(たたき台)について

・コンサルタントより「中間報告骨子」について説明。

(江上副委員長) 最初のI、コミュニティの現状と課題として「1. コミュニティに対する考え方」のところは、前に私が話したことを取り上げてもらえるとのことだった。あの時は、人と人との関係を作ることと、何か問題を解決するために活動していくことは別だということと言いたかった。

これまでコミュニティづくりと言われてきたことは、その両方を混同していたが、考え方としては、とりあえず分けておいたほうがいいのかと言いたかっただけである。

今、武蔵野市で求められていることは、人と人との関係を作っていく部分ではないのか。けやきの場合、運営委員の申し込みの時は、ポスター、チラシ、ニュースなどを見てくる人と、誰かが連れてくる人と、どちらが多いのか。

(橘委員) ホームページを見て、けやきについて関心があった場合もあると聞いている。あるいは、やはり人が声をかけて連れて来る場合が、比率は多いかもしれない。

(江上副委員長) 私はそこがとても大事だと思っている。ポスターやチラシなどを見て、これまで全然関係のなかった人が突然来る場合は、ほとんどないのではないか。やはり、誰かに誘われたとか、「あそこはいいから行ってごらん」と勧められたとか、そのような人

と人とのつながりがあるから、活動に参加してみよう、行ってみようという話になると思う。

隣近所で顔見知りがあったくない人はほとんどいないが、「コミセンに一緒に行ってみましょうよ」と誘えるまでには熟していない関係ということだ。そうした関係にまで熟させるような努力や工夫が、武蔵野市に限らず、都市部では必要なことではないか。

コミセンの役割というのは、そうしたパラパラな人と人との関係を、どうすればもう少し熟した関係にしていけるかということ、それが今まさに課題なのではないか。いい関係をどれだけ作っていけるかが、これから地域をよくしていく上でとても大事なことなのではないか。

(高田委員長) ということは、江上副委員長は、今はそこまでパラパラになってどうしようもないという認識である。私は、逆に、そうした関係は熟しているから、今度は問題解決の行動ができるような枠組みを提示していくべきだという話になると思っていたが。

(江上副委員長) 先ほど井原委員が言った、40年間、何をしてきたのかという話になっていくのかもしれない。いろいろな形で地域の問題に取り組もうと、実際にさまざまな団体があるが、それが今ひとつ盛り上がらない理由を考えるべきだと思う。

(高田委員長) 位置付けが難しくなっている。自主三原則などいろいろなところの見直しをやるべきだという方向にいくのが、筋として一番いいが、もう1つ前に戻って、もっと草の根のところから作り直していく時期というか、危機意識になってきている、それが大切であるという江上副委員長の話だ。

(橋委員) 私もほぼ同じような認識だ。コミセンの役割として、そのもっと前の段階、出会いの場づくりということが、私は一番大事だと思っている。コミュニティについての資料をいろいろ読んでいるが、出会いについては全然触れていない。最初から対話の場になっているわけだ。出会いがあって対話がある。いくら出会いがたくさんあっても対話が生じない場合も多い。そうした意味で、まず顔を合わせる、そしてお互いに口を聞く、そこがスタートだと思うので、そのようなことを取り入れていただきたい。

(西村委員) 江上副委員長の話を聞いて、2つ言いたいことがある。

1つは、うちのコミセンの役割として、町の人が何か課題を持ってきた時に、小さなことであれ、大きなことであれ、ともかくコミュニティ協議会が受けて、それを運営委員会などで必ず話題にする、ともかく受けるということをやっている。

もう1つは、コミセン内の人と人との関係がいい関係になっているのかということ。す

でに今ある人と人との関係をもっといい関係にしなかったら、外から来た人たちに対して、ウェルカム、会ってよかったという関係にできないという気がする。これが今年の中のコミセンの課題だ。

(橘委員) この10年間、「われわれがまずコミュニティをちゃんとしなければ、地域の人にコミュニティなどと言っても通用しないよ」と言っている。運営委員同士のコミュニティがうまくいかずに何がコミュニティなのかということだ。そうした意味で、出会いの場が大事だし、まず運営委員同士のコミュニティは大事だと思う。

(江上副委員長) 今の西村委員の1点目は、地域の事務局という話だと思う。

協議会が地域の事務局になっていったほうがいいのではないかと提案の具体例ではないか。出会いを作る話にしても、持ち込まれた課題を受け止めて何とかしていくという話にしても、コミュニティ協議会の役割は、とにかくいろいろなものをつなぐということ、それが人と人とであれ、課題と地域であれ、つなぐというキーワードは共通している。

そうした役割を考慮すると、土台となる部分がはっきりしてくる。何か土台のようなものを提示して、コミュニティ協議会や市民に聞いてみたらどうかと思う。

(橘委員) 実際のわれわれの意識とすれば、イベントにしても何にしても、コミュニティを作っていくという認識がないままやっているケースが多い。昔からやっているからとか、何月には何をしなければいけない、7月には七夕をしなければいけないとか。集まってくるメンバーはいつも同じ、これではいけないだろうということだ。コミュニティを調整していくためのものだという意識が、今ひとつ欠けているのではないか。それを意識させながら、やっていくことだと思う。

(島森委員) けやきコミセンでは、毎年目標を掲げているが、今年の実務局の目標が「初心に帰ってさらなる躍進、さらなることを目指そう」だ。けやきは常に話し合いを大切にする、あるいは始まった頃から声かけをするということにとっても重点を置いている。

昔に戻るという意味ではないが、違う視点から見ながらやってみることが、利用者が興味のあるものがあり、何か1つのつながりになってくるのではないだろうか。

今、さらなる課題が出てきている。実は、とても仲が良く、とてもまとまりがあって、どんどん大きくはなっているが、そこだけに固まらないようにするためにはどうしたらいいか、が最近話し合いの場に出てきている。あまりにもそこが仲良くなりすぎると、逆に新しく入る方が入りづらい。だから、その壁を取り除くにはどのような工夫をしたらいいかということは、考えているところだ。

(清本委員) そこに立ち寄ってみたくなるような仲の良さ、しかし排他的ではない仲の良さが必要だと思う。

(橘委員) 放っておくと、必ずそうになってしまう。最初のメンバーのレベルが上がって、そこに新しい人が入っても、とても馴染めないのが問題だ。

(清本委員) あまりにもレベルが高い卓球のグループがあって、初心者でも入れるような余裕があると入れるが、見ているととても入れないことがあった。

それと同じようなことが、メンバーの中心になる協議会の人たちにも言える。

(島田委員) 違う視点だが、入れないなら、新しく作ることはできないのか。では、初心者だけでやろうとか。逆の言い方をすると、うまい人は、やはりうまい人同士のほうが楽しい。大きな包容力を持つという意見もあるが、たとえば初心者でやるということも1つの方法ではないのか。それが進んでいくと、そこで融合が始まるかもしれない。

(江上副委員長) うまい人の卓球を、指をくわえて見ている人がいたら、それに目ざとく気がついて、「では初心者のグループを作りましょう」というつなぎ役が、コミュニティ協議会に必要なのではないか。そうしたことが期待されるのではないかと思う。

(清本委員) やはり要するに、コミュニティ協議会を動かすのは人だ。人と人をつなげる意識を持っている人が必要ではないかと思う。

(江上副委員長) 今なかなかひと声かけることが、できない世の中になっているのではないか。卓球を見ている人に、「どうしたのですか」「卓球をやりたいのですか」と、なかなかひと言かけづらい。これは、別にコミセンの中だけではなく、世の中一般にそうだと思う。そのようなコミュニケーションがしにくいことも、パラパラという意味に含まれている。

(高田委員長) 近藤委員の小学校の声かけ運動などがある。

(近藤委員) とりあえず、順調ではないが、学校の回りで日々続けている。毎朝、校長、副校長、主幹、教諭が4人で回っている。

(高田委員長) 反応はどうか。

(近藤委員) 子どもたちはあたりまえに挨拶している。結局、こちらが目指しているのは、大人と子どもたち、それから大人の人同士で顔見知りの関係を作ろうということが狙いだ。しかし、学校の回りの家にはチラシまでまいたのに、無視されたりしている。もう少し派手な仕掛けが必要かと思うが、ただ焦らないでいこうと思っている。

(高田委員長) 一番の、コミュニティの昔のところに戻ってしまった。第一期、第二期

あたりに戻りそうな気がしてきた。

(西村委員) 先ほど気になったのは、自主三原則の見直しということだが、私は自主三原則の確認だと認識している。確認の中身がふくらんだほうがいいが、見直しという言葉は使いたくない。

(事務局) 今回出た様々な意見を踏まえ、再度修正案を作っていきたい。

(高田委員長) 次回、今皆さんの言われたことをもう一度考えていただきたい。また、せっかく意識調査が出ている。出会いの場ということを考えながら現在の状況を見ると、どのような働きかけが見えてくるのか、そのような現状分析ができれば大変いいと思う。今の話と前の意識調査をもう一度ご覧になって、7月9日に来ていただきたい。それではこれで終了する。

(事務局) 今日出してもらったアンケートのクロスの部分と、自由記述についても提示したい。

次回の日程は、パブリックコメントを求めるために、お盆明け、8月末ぐらいに出して、その前に2、3週間の期間を置くとすれば、やはり8月上旬に最終的な案の確定をしたいと思っている。

- ・ 次回日程 7月9日(木) 午後6時30分～ 総合体育館 視聴覚室
- ・ 次々回日程 8月6日(木) 午後6時30分～ (場所未定)

[了]

## 第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

### 第12回委員会

#### 議事概要

日 時：平成21年7月9日（木）18:30～

場 所：総合体育館 視聴覚室

出席委員：高田委員、江上委員、小木委員、橘委員、島森委員、渡邊委員、中村委員、  
井原委員、和久田委員、近藤委員、増田委員、西村委員

（事務局） 今回は自由意見の回答が非常に多く、自由意見の回答者数が383件あり、全体の約3割になった。20代の方が10%、30代、40代の方がそれぞれ18%、19%で、ほぼ全体の半分ぐらいになっていて、若い方のコミュニティに対する関心が高いという印象を持っている。

本日はアンケート調査も踏まえて、さまざまな意見をいただきたい。

#### 議事

（高田委員長） 先日7月3日に、江上副委員長と私、事務局と話した結果、コミュニティのとらえ方についてきちんと整理しようということになった。それをもとにしないと、いろいろな意見を出しても分散してしまい、はっきりつかめなくなる。江上副委員長から、もう一度コミュニティについての概念について説明いただく。

#### ・資料4 コミュニティのイメージ図 説明

（江上副委員長） これから、コミュニティをどのようにとらえていくかに基づいて中間報告を作っていく時、何を論点にすればいいかをまとめた図について説明する。

ここで上の段と下の段に2つの四角があるが、これまで言ってきたように、2つに分けて考えたほうが良いということだ。1つは地域での人と人とのつながりというレベルの問題だ。上の段は、地域での活動のレベルの問題だ。現実の地域ではこの両方が渾然一体となっているわけだが、考える上では分けておいたほうが良いだろう。

左側にある縦長の楕円形がいわばコミュニティだ。右側の楕円形はコミセンという装置、施設だ。このように分けて考える。地域がどうなっているか、コミュニティがどうなっているか、2つのレベルで考えてみると、人と人とのつながりというレベルで地域のことを

考えると、知り合いをどう増やしていくか、ともだちをどう増やしていくか、という問題があるのだろう。また同様に、人と人とのつながりというレベルでコミセンの役割を考えると、この間の提案のような出会いの場を作っていくという話になるのだろう。

上の段の地域の活動というレベルでコミュニティのことを考えると、まちづくりをどう作っていくかということが課題になる。コミセンはまちづくりに向けた対話の場、課題を抽出していくような場として機能していくのだろうと、まとめてみた。そして、真ん中にコミュニティ協議会がある。

コミュニティ協議会がどのような役割を果たしていけるのかを、4つに分けて考えてみるというのではないか。

この4つの局面でそれぞれ、現状と課題を最初に考えることになる。その現状と課題について、コミュニティ協議会はどのように役割を果たしていけるのかを考えていくと、話が整理できるのではないか。

骨子の修正版もこのような流れで作られ、整理されているはずだ。

中間報告というのはここで議論したことをまとめて、市民に広く提示し、いろいろな意見を伺うための材料だから、あまり細かいことを書くよりも、論点をシンプルに提示したほうがいいのではないかと思う。

(井波委員) 二度と行きたくないという意見や、私物化の話について、私はコミュニティ協議会で、館の運営、受付、イベント、すべてをやっていることにその原因があるのではないかと、思っている。

コミュニティ協議会というのは、本当の意味でコミュニティづくりに専念して、たとえば館の運営や受付業務は、市民協働サロンの受付のようにNPOに依頼する、そしてきちんと区別をしたほうが、今までのいろいろな問題がすっきりするのではないか。

(高田委員長) 館の運営、受付というのは、この図ではどこになるのか。

(江上副委員長) それは場合による。たとえば窓口をどうするかはこの辺、出会いの場をどう作っていくかというあたりで問われてくる問題だ。また、地域の事務局という部分を落としてしまった。上の段の対話の場のところに入れておきたかったが、またあとで追加説明する。

館の運営とひと言で言っても、活動を促進していくという立場と、人と人とのつながりをどう付けていくかという場合では、やることは違うだろう。そこを一緒にしないで、分けて考えたほうがいいのではないかということだ。



(高田委員長) たえば対話の場と出会いの場があるが、それぞれ、館の運営を両方に入れて考えるということか。

(江上副委員長) そのように分けて考えたほうが、名案が浮かぶのではないか。

(高田委員長) 今、枠組みについて考えている。他に「ここはこうなのではないか」といった疑問があれば、意見をいただきたい。

(江上副委員長) 行政は別枠で考えたほうがいいのか。この中には入れ込めないと思う。

(高田委員長) ここにあるのはコミュニティだ。全体のコミュニティの中で、コミュニティ協議会を中心にやっているわけだが、コミュニティの中で行政の位置というのはどこかに必要なのではないか。

(江上副委員長) 考え方としてはコミュニティ協議会の裏側にいるという位置づけになるのではないか。どうバックアップできるかということだ。

(高田委員長) 行政が今まで黒子的な役割をしていた中で、もう一度位置付けを考え直す時、概念としては協働、パートナーシップということが出てくると思う。そうすると、ここの中での位置付けとして入れたほうがいいのか。それをどこに入れるかとなると。

(江上副委員長) 協働云々という話は、これまで議論をしていたのか。

(高田委員長) していない。

(江上副委員長) それは、そのようなことが言えるかどうか、ということから議論したほうがいいのかと思うが。

(高田委員長) 1つの方向付けをする時に、今まで自主三原則をもとにコミュニティを考えてきた。これをもう少し現在の状況に合わせた場合、協働という考え方を中に入れたほうがいいのかと思っているが、これは皆さんと話をしていないので、どこに入れるか、今のところは保留にする。

次に、清水さんに伺うが、たたき台は役割と機能と江上副委員長が言った部分で書く形になっているのか。

(みずほ・清水) 右側のコミュニティセンターについては記述してあるが、左側のコミュニティにおいて土台の部分ではどうあるべきか、活動の部分ではどうあるべきかの話がないかもしれない。

(増田委員) 行政は、今はお金だけ出して丸投げ状態だ。うまくいっている時はいいが、

うまくいかないと一部の運営委員が私物化したり、利用する人が決まってしまうので、ある程度市が関わってもいいのではないか。市が介入するとか、会計監査するといった上から目線ではなく、市の職員が相談に乗れるような仕組みを作っていたらどうか。

あるコミセンの利用者懇談会に参加したところ、サービスする側とされる側に完全に分かれてしまっていて、共にコミュニティを作っていこうという姿勢がまったく見られなかった。これだと新しい人も入りにくく、姿勢を変えていかないと利用者は絶対に増えないだろうと思った。

(高田委員長) サービスする側というのは、この図ではどこにあたるのか。そもそも利用者懇談会というのはどこに入るのか。

(増田委員) 市が相談に乗れる仕組みを作ったほうがいいと思うので、コミセンの外側に、市がいるという感じだろう。

(高田委員長) 今の利用者懇談会において、サービスする側というのは、協議会で、される側というのは利用者だね。

皆さんで何か活動していて、この活動は江上副委員長のイメージ図のどこに位置付けられるのか、というものがもしあったら、発言していただきたい。

(西村委員) その場でいろいろとみんなの意見を聞いて、そこでは回答しないということで、つい最近利用者懇談会を行った。とにかく話を全部承って、運営委員会なり役員会で話をして、また皆さんに返す。この形式については、こちら側とあちら側になってしまったが、そのような形に変えてみた。

ではそこでいろいろな問題が出てきた時に、市がどう関わるかというのと、これは関わる問題ではなく、基本的に中で解決する問題だと思う。これはコミセンの中の貴重な対話の場だと思う。それを本当の対話の場にするには、協議会側の意識も変えなければいけない、考えなければいけないし、利用者のほうも、コミセンをみんなをよくしていくのだという意識を持たないとだめだと思う。この辺までは、私も分かるのだが、どこでどのように行政が関われば、今のコミュニティ協議会の活動やまちづくりの活動が、より活性化するかが、よく分からない。どのようなことをやってほしいかが分からない。

協働ということは、たとえば道の問題を考えている場合は、まちづくり推進課との間の協働、関わりだと分かる。しかし一般論としては、なかなか難しいと思う。うっかりするとよけいなお世話になる。

やはりまだお上意識というのは強く、コミセン側は素直に従ってしまうところがあるか

ら、そこをクリアしないとだめだろう。

(高田委員長) 今の状況について、コミュニティ構想は自主三原則という形で作ってきている。だから、行政は退いていて、アシストをすることになっている。

もしこれからのことを考えていくのなら、行政の位置付けで、パートナーシップということ、今回どこかで論じないといけないのだろう。それで今、行政について話をした。

(中村委員) コミセンをただ自分たちが利用する場としか考えていない方は、利用者懇談会に出てきても、中に入ってこようとしないと思う。そのような人たちにどう対処するかをどこかに入れるか、入れないか、というのは多少考えてもいいのではないか。

(高田委員長) この間やったアンケートで、コミセン活動などに関わりたくないという人が40%ぐらいいたが、その人たちをどう位置付けるか、という話になるのか。

(中村委員) そのような人たちは入れなくてもいいという気もするが、そのような人が4割もいるということは、考えたほうがいいのではないか。

(高田委員長) それでは、たたき台でどのようになっているのかを、清水さんが、説明する。

#### ①中間報告骨子（たたき台・修正版）について

みずほ情報総研より、「中間報告骨子（たたき台・修正版）」について説明。

(江上副委員長) 補足すると、5ページのコミュニティの活性化に向けた方向性のところで、「コミュニティセンターに求められる機能と役割」とある。私が描いた図で、4つあるのは、これからこのようなものを目指していくというある種の方向性を描いている。5ページの一番上のコミュニティセンターに求められる土台づくり、出会いの場となることが必要ではないか、必要だと書いてあって、それに向けて何ができるか、というのが、図の緑の矢印だ。

(高田委員長) 江上副委員長の図の左側のコミュニティだが、コミュニティ協議会がコミュニティに関わるということは、コミュニティ協議会が上のほうでまちづくりをおこなうということか。

(江上副委員長) そうは描いていない。地域のまちづくりという活動に対して、コミュニティ協議会がどのように手を貸せるか、という話だ。私は「地域の事務局」という言い方をし、清水さんは、一例を挙げれば団体間のコーディネートという言い方だったが、そのような役割がまさに左上の矢印のところに入ってくるのではないか。

(高田委員長) そうすると、下のほうはどうか。

(江上副委員長) 下のほうはサポート隊だ。5ページが一番下の「・」に「たとえばお友達づくりサポート隊」と書いてある。これはどのようなことかという、前回の近藤先生の話がヒントになっている。

ただ、サポート隊を作って、コミセンの中でサポート隊が待っていて、来た人をつかまえて「さあ、何かやれ」という話ではなく、もっと曖昧な、自然な形で、窓口とは限らずコミセンにいる方が自然に案配していくようなことができればいい。

(島森委員) 実際に体験したことがある。

つい最近武蔵野市に転入されてきた方が、けやきコミセンにふらっとご夫婦で立ち寄った。たまたまその時に私がいたのだが、「コミュニティセンターとは何ですか？」という質問に対し、ハードの面は簡単に、ソフトの面については「コミュニティセンターは武蔵野市の中に16館あって、いつでもどこでも寄れるところで、無料で使えるから、利用できる方法を見てください」と言って、けやきの中を紹介した。

ご夫婦が帰る時に「夏祭りがありますので、ぜひ一度寄ってみてください。そうするとこの辺の地域のことが分かるかもしれない」と言って、お誘いした。コミュニティというのは無理やり何かを言うのではなく、徐々に緩やかな結びつきを作る、とにかく声かけをすることで知ってもらい、知ってもらいことが第一で、次に知ったことで地域を好きになってもらい、好きになれば自分たちも活動に参加したいと思ってもらえるのではないかと期待して、帰っていただいた。

(西村委員) 先ほどから出ている行政の関与のあり方、サポートのあり方は、もう少しみんなで意見を出し合ったらいいのではないかと。専門館との連携、専門職、市の職員のサポートのようなことでは、実際には児童館からのサポートがあった。桜堤児童館から年に1回来ているようなものが専門館との連携の例だ。

実際にこれはずっと言われていても、あまりはつきりしていないというか、もう少し、どのようなことがコミュニティ協議会にとって、コミュニティセンターにとって役に立つのかということも含めて、皆さんのご意見を聞きたい。

(高田委員長) 行政のサポートのあり方というのは、聞きたい内容は専門館についてか。

(西村委員) 行政の関与のあり方についての中身だ。サポートとか、専門館との連携とか、いろいろ言葉としてはあるが、実際にどのようなことがあって、またどのようなことが期待されているのか、ということだ。6ページの行政の関与のあり方のところで「イベ

ント、企画へのサポートなど」と書いてあるが、この内容について実際に皆さんの経験であるのかもしれないので、少し話し合っただけで欲しい。

(事務局) 西村委員に質問だが、児童館との連携の場合、移動児童館のようなことをする。それがあくまでも移動児童館でしかなく、コミセンを使った児童館のイベントでしかなく、コミセンのさまざまな活動へのサポートになっていないという気持ちがあるということか。

(西村委員) 専門館との連携について、始めからずっと言われながら、事例としてはこれぐらいではないかと思う。児童館との連携の場合、年1回のイベントに過ぎないのではないかと。

専門館との連携といった時に、どのようなことが考えられて、どのようなことができなかったのか。あるいは、他のコミセンでできているところがあれば、伺いたい。

私がこのように言う裏には、ある意味、試行錯誤で地域の人たちはこの30年間一生懸命コミセンに関わって、それなりの実績も積んできている。ただ、非常に本質的なところでのトレーニングのようなことがあれば、もう少し豊かになったのではないかと、もう少し早く進められたのではないかという思いがいつもあった。

「自主三原則を重視するあまり、コミュニティへの関与に消極的だったのではないか」という言葉自体が、本当にそうなのだろうか、と思っているところもある。ただ、今後のことを考えた場合に、今きちんと行政との関係を考える時期ではないかと同時に思うので、皆さんのご意見を伺いたい。

(井原委員) 意見を聞きたいというのは、ここにこのようなことを載せておくべきかどうかなのか、ということなのか、それとも具体的にどのような関与をしていってもらいたいということなのか。

(西村委員) これだけの中身だと、はっきり言えば中身がない。もっとみんなが話し合っただけで、私たちがどのようなことを望んでいるのかがもう少し書き込まれるかどうか。「イベント、企画へのサポート」といっても、これは何を考えているのか、私はよく分からない。もう少し話し合っていると、見えてくるのではないかと。

(井原委員) 中間報告ということは、当然パブリックコメントで市民の皆さんから意見を求めるということと、またこの委員会そのものが中間報告以降にどのような議論をしていこうか、という自分自身への課題でもある。そう考えると、今回は8月6日しかないわけで、今ここで急に行政の関与についてあれこれ話しても、足りないのではないかと。もち

ろん、間違いなく、考えなければいけないということだと思う。

私自身が行政の関与について問われると、対話の場や出会いの場に、正直言って行政には出てきて欲しくないで、まちづくりのほうだけで十分だ。

伺いたいのは、行政の方が、最近よく「地域の皆さんのコミュニティで解決して欲しい」「地域の皆さんのコミュニティを生かして欲しい」ということを言う。行政の皆さんが指しているコミュニティはいったい何なのかと。そう言われると行政が何をイメージして言っているのかということがとても気になる。

(高田委員長) 今の提案で、行政というのは、図の左側のところのまちづくりのところに出てくるであろうと。下のほうの友達づくりではどうか。

(井原委員) 友達づくりのところに行政は入れて欲しくない。

また、貸し館でいいと思っている方たちについては、この図の下のあたりに位置するのではないかと思う。その方たちのことを、考えておかないといけないのではないか。

(江上副委員長) 今の話に続けて言うと、「貸し館として使えれば満足だ」という人たちは、たぶん右上のところの現状と課題に入る話だ。何かコミュニティ活動をしていきましようという時に、コミセンをもう少し対話の場として使い、対話を通じて、何かまちづくりの一翼も担って欲しい、それがコミセンの目指す姿なのではないのか。コミセンの部屋から出てきて、もう少し一緒に語り合ったり、町のことを一緒に考えたりする、あるいはまちづくりの活動をちょっと担ってもらうことができないだろうか。そのように彼らを部屋から呼び出すのには、いったい何をすればいいのか、それがコミュニティ協議会の役割なのではないかと思う。

(井原委員) それはたとえば卓球の部屋があって、協議会の方が主催して、トーナメント試合などを組んで、個人でやっている人も、団体でやっている人も、皆さん、出てきてくださいということか。

(江上副委員長) その通り。そんな仕掛けを協議会がやったらいいのではないかということだ。

ついでに言えば、今日のたたき台の中にもイベントの話が出ているが、どうやって、コミセンで出会い、友達を作れるようなイベントにしていくのか、ということもコミュニティ協議会がこれから考えていく課題、役割だろうと思う。

(和久田委員) 私も江上先生に同感だ。今までのコミセンは、団体が館を借りて、何か自分たちの目的のためにやっていたが、これからは、やはり団体と団体をつなげていくコ

ーディネートをすることがコミセンの役割になっていくのではないかと思う。

(井波委員) 江上副委員長の描かれているまちづくりについて、アンケートを見た時、一般の人から見ると、コミセンがまちづくりの拠点ということに違和感がある。本来であればコミュニティづくりの拠点というのが正しい表現ではないか。そうすると、まちづくりと一括りで描くのはいかがか。

江上副委員長が「まちづくりの一翼」と言ったが、一部分だ。たとえばアンケートで防犯、防災といった、本来コミュニティ協議会が背負い切れないようなことを、かなりの人が期待している。ここは、もしこの図が表に出た時に、まちづくりという言葉が過大評価される可能性がないか、懸念される。

本来のコミュニティ構想の中にまちづくりという文言はない。だんだん期待がふくらんできて、そうなっている。しかし現実問題、コミュニティ協議会がこれだけのことを背負いきれるのか。ここに書かれているように、課題について、できることから1つずつ解決していくことがこの図だろうと思うが、まちづくりという言葉が少々大きすぎるのではないか。

(近藤委員) 最初にこれを見た時、コミュニティ協議会がこの中心にあるのだろうか、とても驚いた。またコミセンとコミュニティが対等のものとしてあることに違和感があつた。私の中で今まで考えていたのは、コミュニティというものの中核になるものとしてコミセンがあつて、その運営をする機関としてコミュニティ協議会があるととらえていた。

コミュニティ協議会が請け負えるものは、ここにある4つをもう少し限定しないと、広くなりすぎるのではないか。

(高田委員長) 今、われわれが考えなければいけないのは、コミュニティとコミセンとコミュニティ協議会だ。この3つの関係を、江上副委員長が試案としてこの図を出している。図というのは、1つの考え方をモデルとして描いているものだから、いろいろな形を考えればよいと思う。

上と下を分けた図に、今言ったことを反映させていくものが考えられればよい。

(島森委員) この図では役割と機能、それぞれ分かれているが、そこにどのようにソフト面とハード面が入っていったらいいか、当てはまるものがあるかという考え方もあるのではないか。

(高田委員長) まちづくりという時にソフトとハードがあつて、たとえばまちづくり条例は基本的にハードだから、建築の専門家たちがたくさんいる。しかし実際にそのまちづ

くりを動かしているのは、ソフトのところをやっている。

まちづくり推進課と市民活動課のコミュニティ係との役割を分けるということが、もう1つはっきりしない。ソフトとハードをこの図に入れていくと、いよいよ複雑な図ができてしまう。

(江上副委員長) そんなことはない。

この図は基本的に機能的な連関図なので、○の大きさや位置などにはあまりこだわらないほうがいいのかということだ。それから、コミュニティ協議会がこの4つを担うという話ではない。ともだちづくりなどは、地域ではないところでもやっているが、地域でのともだちづくりに何か手助けをできることがあれば、こんなことがあるのではないかと考えていくための位置づけをしようということだ。ともだちづくりやまちづくりを全部コミュニティ協議会が担うという話ではない。

また、ソフトとハードの話だが、たとえばお茶を置いたらいいのではないか、あるいはサポート的な人がいたらいいのではないかということはソフト的な話だ。ロビーをどうやって作るのか、配置を変えてみようといったことはハードの話だ。そのようないろいろなハード的な工夫というのも役割の中に入ってくると思う。

(西村委員) コミュニティ市民委員会のところでは、コミュニティづくりという言葉を使っていて、今まちづくりについて話をしているが、コミュニティづくりとまちづくりというのは同じと考えていいのか。

(江上副委員長) そこを上と下に分けたところがミソだ。コミュニティづくりとまちづくりというのが渾然一体で使われていた。

まちづくりというのでは漠然としていて、何を指しているのか分からないから、この言葉は考えたほうがいいのかと思う。

(小木委員) まちづくりという言葉を使っても、結局中身は地域での助け合いを目指している。それならばそのような分かりやすい言葉にしたほうがいいのか。江上先生の図はとても整理されてきれいな図で、考え方としても考えやすいが、コミュニティというのはもっと大きな、基盤になる形と考えたほうがいいのかではないだろうか。その中にコミュニティセンターがあり、協議会があると考えたほうが、より自然で考えやすい。

図式で表すのは難しいことで、考えやすい反面難しいことでもあると思いながら拝見していた。

(高田委員長) そうだが、描いていく時にはちゃんと分類してそれぞれを書いていかな



ければいけないので。

(井波委員) 役割と機能ということで4箇所に書かれているが、たとえば右側であれば、対話の場や出会いの場を、簡単な言葉で言えば提供するということだ。左側の下だと、今のお話では、その協力など、何か手助けをするということが実際だ。役割と機能と描かれると、どのようなことなのかと迷う。

コミュニティ協議会ができる範囲でやるのだということがある程度分かるような図であればいいのではないか。

(井原委員) この図は中間報告に載せるのか。

(江上副委員長) 私はそのつもりはない。項目を立てていく時に、ただ箇条書きになっているよりは全体の見取り図があったほうがいいのではないかということのもとに考えていた。論点の整理に使うもの、頭出しの整理だ。

もう1つ、見ておいて欲しいのは、矢印だ。外側の青い矢印はぐるっと回るようになっている。どこかが変われば、少しずつ変わっていくことを示したくてその矢印を付けた。

(高田委員長) 今まで渾然となっていたところを分けることが、江上副委員長のオリジナリティだ。言ってみれば全部がコミュニティだ。そうすると、描いてあるコミュニティというのは、何になるのか。

(江上副委員長) 私は1階と2階を合わせた全体がコミュニティだと思っている。このコミュニティは、地域と言い換えるともっと分かりやすいかもしれない。

(高田委員長) 文脈としては地域の方がいいのかもしれない。

(みずほ・清水) 左側と右側で、何がどちらに入るのか、ということで、迷う時がある。

(江上副委員長) 左側のほうが手薄だったのではないか。どちらかというとならば右側のほうばかりに目がいって、つまりコミュニティ協議会とコミセンが一体のように見えていた。もう少しコミセンの外にまで目を向けたらどうか、というニュアンスも含んで、真ん中にコミュニティ協議会が来てしまった。

(渡邊委員) これを見ると、考えを進める意味では、役割と機能、現状と課題ということで、今出た問題もこの中で論議できるだろうと思う。そのような意味ではいいのだが、真ん中にコミュニティ協議会が大きく出ることが、必ずしも市民のほうで納得できるか多少心配だ。コミュニティ協議会自身はその地域に住み、働き、学ぶものをもって構成するということは、16 コミセンの中で共通する規約の組織原則になっていると思う。もしそれ

が本当に機能しているのならば、真ん中にコミュニティ協議会があることは極めて自然だろう。今コミュニティ協議会があるが、本当にその地域に住み、働き、学ぶもの全部で構成しているということは、フィクションではないか、神話ではないかという説もある。協議会自身の組織が、今までの状況で本当に機能していたのかは、極めて民主的に運営されているかどうかということが、ものすごく問題だと思う。

また、コミセンの管理運営について、指定管理者制度というものがあるが、この辺との関わりもすっきりしないと、全体の活性化はできないのではないかと。

(事務局) この表自体を載せるか、載せないかを含めて、討議要綱についての意見を、中間骨子がこれでいいのかどうかも含めて、いろいろ出していただき、それをまとめて、中間案を作成したい。

(小木委員) この図をこのまま出してしまうと、市民のほうからこのもとの解説について質問等があり、時間がかかるのではないかと。これは考え方の整理を付けるという意味の図表だから、このまま出さないほうがいいのではないかと。

また、たたき台の6ページのコミュニティ協議会の役割という部分が非常に簡単になっている。具体的な細かい問題を取り上げている記述と、簡単な記述になっている部分と、もう少しバランスが取ればいいのではないかと。

(橋委員) 委員の方々の意見によると、あまりにもコミュニティ協議会に対する期待が大きすぎると思う。コミュニティの概念図としてこの表を載せることについては、私は賛成だが、すべて現状の協議会にこれだけのものをやっていく力があるかは、別の問題で、実際には難しいだろう。従って、その辺のところについて1項目入れておく必要があるのではないかと。

昨日も新しい運営委員希望者の面接をしたが、今までコミュニティに足を踏み入れなかった理由は、私が11年前にコミュニティに入った時に、近所の人に言われたことと同じ、怖いところだと感じていたからということだった。11年経って、私自身もいろいろ努力、改革してきたが、まだそれが壊れていないのだ。もしくは壊れたとしても、悪いイメージはずっと残っていくのだと感じた。

なぜそうなるのかというと、コミセンの中の人事が停滞しているからだ。ある特定のコミセンの人事が停滞していること、もしくは独裁があるということについては、やはり市がはっきり口出しする仕組みを作るべきだ。この30年間、コミセンにすべて委託してきたが、その弊害が、ある意味出てきているのではないかと考える。

もっと開かれたものにしていくためには、まず協議会の中の人事のあり方を透明化していかないと、地域の方々にこれ以上受け入れてもらうことが、なかなかできなくなっているのではないかと感じる。ぜひその辺のところを1項目入れていただきたい。

(島森委員) 5ページにあるコミュニティの活性化に向けた方向性というところで、まだまだコミュニティセンターも知られているようで知られていないという現実があることが、ショックだった。もしコミセンに1人でも興味を持った方がいたら、実際にどのようなふうに通いセンターが運営されていて、市民の人たちも自身で参加できるとか、協議会に参加しなくてもそこに行って、どのようなふうに通いセンターが使えるのかといったところの発信、PRも含めて、役割と機能が分かりやすく打ち出せたらいいのではないかなと思う。使うことによって、町、地域が活性化されれば、それは1つの地域の活性化につながるのではないかな。

ただし、市との協働についてだ。場所によっては勘違いしているコミセンがまだあって、地域としての活動について、本来のコミュニティセンターに本当に求められていることをやっているのかどうか疑問なところもある。第三者の意見についての話し合いの場を調整するために行政の力が必要になるのではないかな、助けがあればいいのではないかなと思う。

(渡邊委員) この表はその役割と機能の点がまとめられていて、コミュニティ協議会の本来のあり方、果たすべき役割と機能についてはっきりさせるという意味で、この図を載ることについての異議はない。

そのような中で自主三原則は堅持すべきだと思う。

(中村委員) 私は、この図はいかにもコミュニティ協議会がコミュニティの真ん中にあるという雰囲気が出てしまうと思う。いきなりこの図が出ると、かなり誤解を生むので、出さない方がいいだろう。

もう1点、行政の関与のあり方で、関与に消極的だったという話だが、現状程度が一番いいのではないかなと思う。行政が出てくると、コミュニティがだんだん均一化されていく可能性もある。行政との関わりについては、逆に行政を使うという考え方でやったほうがいいと思う。

(井原委員) 江上先生の図に関しては、載せるのであれば今後の論点の整理という部分をきちんと出してからのほうがいいと思う。コミュニティ協議会が真ん中にあるのは、誤解を受けるとよくないが、もっとも武蔵野市にコミュニティ基本構想があり、それを今後きちんと市民にアピールしていくのだと考えたら、逆にここに大きくコミュニティ協議会

があっても、それはそれでいいが、それは今後の議論のやり方として残したほうがいいのではないか。

中間報告の部分で、5ページのコミュニティの活性化に向けた方向性と大きくくくってある中に、コミュニティセンターの運営のあり方の記述がある。その内容で「土台づくり」とあるが、この土台が、3ページの土台を示しているのであれば、いきなりコミセンの運営のあり方ではないのではないかと、しっくりこなかった。

また前の、コミュニティの現状と課題というところで、1. コミュニティの現状と課題、2. コミセンの現状と課題、その次にコミュニティとコミュニティ活動があるが、できれば2番と3番を入れ替えて欲しい。あくまでもコミュニティセンターもコミュニティの中の1つとして、と書いたほうが分かりやすいと思う。

(高田委員長) 具体的にどうするのか。大きな項目を付けて、その中の小項目として、コミュニティセンターを入れたほうがいいのか。

(井原委員) コミュニティセンターもコミュニティの中の一翼を担っているというようなことを書いた方がいい。同等に扱っていいのかどうかという疑問もある。

もう1つ、江上先生が言ったように、あの図の左側のほうが今まであまり話されていなかったということを、今後の検討課題としてここにきちんと載せておくべきだ。アンケートもそうだし、今までの委員会を傍聴された意見の中にも、コミセンのことだけではなく、コミュニティそのもののことを考える時間をもっと取って欲しい、と書いてあったので、それは載せるべきではないか。

(和久田委員) この図に関しては、コミュニティ協議会が真ん中にあると、コミュニティ協議会としても荷が重いような感じがする。しかし、考え方としてはこうだろう。もし載せるとしたらいろいろなコメントを付けて載せないともまずいのではないか。

また、アンケートのところで、若い人からの回答がたくさんあったということ踏まえたコミュニティづくりを考えていったほうがいいのではないか。

(高田委員長) 若い人が、自分たちも加われるようなことを考えて欲しいと、自由意見の中で多かった。

(井波委員) 中間報告の5ページは、他のところと違って、たとえば「必要ではないか」という問いかけになっている。前のところは「必要である」と言い切っているので、ここは全部統一したらどうか。

江上先生の表については、中間報告の段階では必要なく、最終報告に出せばいい。とい

うのは、コミュニティ協議会に対するあり方について、この場で議論しておかないといけない。そのようなことを議論した上で、最終的にはコミュニティ協議会の各16の方々にもその報告書を見ていただくべきだ。たとえば運営のあり方、土台づくりなどについては、具体的にある程度提言すべきだ。

(近藤委員) 図は、ここで話し合ったことの構想図として載せるほうがいいと思うので、今日の図をたたき台にして、いろいろ話し合った結果として、中間報告に間に合えばそれでいいし、間に合わなかったら最終でもいいと思う。

コミュニティ協議会が中心にあるのは、本来担っているべきことなのだろうと思う。

私の立場から言うと、自分が学校の教員として、コミュニティづくり、まちづくりに関わっている学校が真ん中にある。それぞれの立場で真ん中にくるものが違うということをごくどこかで表せるといいのではないかと。

また、先ほど江上先生が言った矢印があって、螺旋状によい方向に向いていく、螺旋の図が表せばいいのではないかという思いで聞いていた。

(増田委員) 私はコミュニティの活性化に向けた方向性のところで、コミュニティセンターのあり方、土台づくりのところで、もう少し具体的に書いたほうがいいのではないかと。

たとえば毎年恒例に開催してきたイベントなどについては、毎年それをやる意義なども確認する作業をしたほうがいい。このイベントをやるとこのようにコミュニティづくりに役立つというような、具体的な表現があったほうがいいのではないかと。

(増田委員) 土台づくりには、運営するメンバー、人々が一番大事なので、少しずつ運営委員を入れ替えていくか、増員していくことが不可欠だ。とにかく風通しをよくして、入りやすい雰囲気を作っていくようにしないと、自然発生的に交流が生まれる出会いの場所にはなりにくいのではないかと。

(西村委員) I. コミュニティの現状と課題のところは、1. 2. 3. となっているが、3の中身がかなり大事だ。1. 3. 2. の順番にするか、逆に3. 1. 2. の順番にして、3を大事にしたほうがいいのではないかと。

また、行政については、コミュニティ協議会側から必要な時に門を叩く、そうすれば行政が応えてくれるという関係、協力を前提として欲しい。

また、たくさんの自由記述を読んで、「二度と来たくない」というコミセンが、依然として少なからずあるということで、これはやはり窓口の対応が原因だと思う。多くのコ

ミセンであることだとすると、何か問題提起がこの中でかけないだろうか。各コミセンで解決できるなら、もう解決しているような、大きな共通問題なので、このような場合に市民と一緒に考えることで、何かのきっかけになればいいと思う。

(江上副委員長) 言いたいことが2つある。1つは、私たちは現状認識を共有したほうがいいだろうということだ。

ネットワークごと、団体ごと、活動ごとが、パラパラになっているという現状認識があって、武蔵野市がこれから目指すことは、そのようなパラパラ状況ではなく、少なくともコミュニティでそれをつないでいくことを目指そうという共通認識が、あるのかどうかということだ。

もしそのような現状を共有できるのなら、たぶん今回の中間報告のキーワードが出てくるのではないか。それは「つなぐ」「つなげる」といった言葉だと思う。誰が、どこで、どうやってつなぐのかを考えるべき段階になっていて、それに対する一定の答が、今日のたたき台で私が言ったようなことに出ているのだということだ。

もう1つ、今日のたたき台では「行政の関与」という言葉を使っているが、この「関与」という言葉は、行政とどのような関係を作るか、などの言葉遣いのほうがいいのではないか。

行政との関係について2つぐらい言うと、1つは、パートナーシップ、協働の問題だ。これは行政とコミュニティ協議会とのパートナーシップを考えているのかどうか。つまり、行政と何がパートナーシップを組むのか。そのパートナーシップを組まなければいけない必然的な理由は何で、その効果は何かということを考えなければいけないだろう。

また、関わることとして自主三原則だ。自主三原則は、堅持ではなく、死守すべきだと思う。これまでは自主三原則が生き残ってこられる政治状況だったが、10年後、30年後も、この自主三原則が保障されるような政治状況だという保障は、どこにもない。これはきちんと死守すべきこと、市民の権利として死守すべきだと、私は思う。

また、自主三原則を盾に勝手なことをやっているコミセンがあるので、行政が何らかの関与をして正していくべきだ、という意見には、あまり賛成できない。そのようなコミセンがあるならば、コミセン同士が力を出し合って何とかすべきだ。そうしたややこしいことは、行政に任せて何とかしてもらうのは、コミュニティが目指す方向性ではないと思う。

(高田委員長) 江上副委員長の図を下地にして書いたほうが無難ではないかという気が

する。

また、江上副委員長の自主三原則の考え方は、その通りだと思うが、私の考えはこの上に何かをするということだ。私は自主三原則の上にパートナーシップと思っているわけだが、その辺もまた考えてみる。また、まちづくりということをどのように出すかについても考えてみる。

(事務局) 今皆さんが話し合っているのは、このアンケートの追加資料と自由意見をもとにしていて理解している。だから、あえてもう一度そのための場を設ける必要はないのではないかと思う。

(渡邊委員) たたき台の目次の中で、「行政の関与のあり方」とある。研連の役割というのが第五期に出ていたが、ここに出ていないのは、何か理由があるのか。

(高田委員長) これはたたき台なので、まだ考えていないだけだ。研連を出そうということか。

(事務局) 研連について、表記的にはどのような形を予測しているのか。研連の意義ということか。

(渡邊委員) それぞれ望ましい組織にならない場合の解決方法で、コミュニティ協議会で自浄作用があるのが理想だ。

次に、そのような問題の解決が困難で、コミュニティ協議会同士でそのような問題の解決策をおこなう、いきなり行政の関与ではなく、コミセン同士でやっていく場合に、研連として何かそのような役割を担う装置があったほうがいいのではないかということ、第五期で若干唆がある。今言ったような、問題を解決する機能を研連の中に持ち込むということは、役割の中での論点の1つになると思う。従って今定着している研連の役割ということを目次に入れてもいいのではないか。

(高田委員長) こちらで考えてみる。佐藤さんは、市民委員会は専門家はいらないので、市民に任せてしまえばいいのだということで、研連が発足したと言っている。

(事務局) この図表の取扱いだが、入れたほうがいいのかという意見とそうではない意見が半々になっている。この取扱いだけ確認させて欲しい。

(江上副委員長) 作った本人の意見としては、このままだと誤解も多いと思うので、これは今日の議論の頭出しのための資料ということ、報告書の原稿ではないとしていただきたい。

(渡邊委員) これから論議をする時に論点が明確になるし、論議を活性化する意味では、

図があったほうが理解しやすい。論議を進める上での1つの考え方ということで、理解を助けるための図だとしたら、これは意義があるのではないか。

(高田委員長) しかし、もしこの図を載せたら、コミュニティ協議会が真ん中にきていることを、市民がどう思うかという議論になるので、むしろコミュニティ、コミュニティセンター、コミュニティ協議会という形の中で論じていったほうがいい。だから、最終報告の時に出したほうがいいと思う。

## ②当面の日程について

(事務局) 7月3日に正副委員長と打ち合わせを行い、今後しばらくの流れがどうなるのかという方向付けをした。

次回8月6日委員会で中間報告完成、15日ぐらいには配布できる形にし、市役所、各市政センター、コミセンに置いて、市民の方に見てもらおうという段取りになる。

それ以降に、約2週間を使って中間報告に対する市民からの意見をもらうパブリックコメントと同時に、市内3箇所ぐらいでヒアリングをおこなったほうがいいだろう、中間報告に対する皆さんの意見を直に聞く場を設けたほうがいいということになった。

以下の日程でヒアリングを実施する。

9月15日(火) 夜 境市民会館

9月18日(金) 午前 吉祥寺公会堂

9月26日(土) 午後 芸能劇場

9月の委員会はこの3回のヒアリングに置き換える方向が最適ではないかと考えている。

先ほどの行政の関与という話については、行政がコミュニティ、コミュニティ協議会、コミュニティセンターに対して、各部署でどういった期待を持っているのかということについても、庁内での意向調査をおこなう、中間報告を受けて意向調査をして、今度最終報告をまとめる際の1つの材料にしていくことも必要なのではないかと考えている。

(西村委員) 8月6日にはまだ修正が効くのか。

(高田委員長) 修正は効く。

[了]